



④高精度放射線治療専用機「ノバリスエッジ」は、前立腺の位置をリアルタイムに確認しながら放射線を照射できる。
⑤患者に放射線を照射している間、画像で前立腺の位置を追いかける（いずれも広島市中区の広島平和クリニック）



前立腺がん

放射線治療

わずか5回に

いち早く始動の広島平和クリニックや土谷総合病院

男性のがんで最も多い前立腺がん。広島県内ではいち早く4月から、広島平和クリニック（広島市中区）が、5回照射の「定位放射線治療（SBRT）」を本格的にスタートさせた。これまでの放射線治療は、2カ月にわたり20〜40回に分けて放射線を当てるのが標準だったが、機器の進化などにより、わずか5回に短縮。患者の負担が軽くなっている。

「当てたくない所に
当てない」

前立腺がんは、5年生存率は99%と高い一方、死亡する人が年間約1万3千人に上る。適切な治療が求められる中で、ロボット支援による手術と並んで高い治療効果が期待されるのが、放射線治療だ。

広島平和クリニックの広川裕院長によると、5回照射のSBRTを可能にしたのは、前立腺に対して「よりピンポイントに」放射線を当てる



広川院長

「当てたくない所に 当てない」

技術という。「当てたくない所に当てない」ことで、直腸出血や排尿障害などの副作用を最小限に抑えられる。その結果、1回当たりの放射線量を増やし、治療をスピーディーに進められるようになったという。

前立腺がんの放射線治療の変遷

	1回当たりの放射線量
通常分割照射	39〜37回 1.8〜2グレイ
中等度寡分割照射	28〜20回 2.5〜3グレイ
SBRT	5回 7.25〜8グレイ

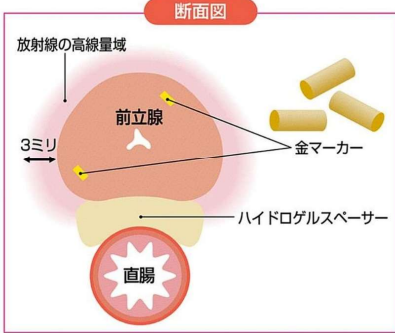
ピンポイント照射で副作用最小限

つまり、監視によってずれを防ぐ仕組みだ。これまでは前立腺の周りの余白部分（マージン）を5〜7ミリ取っていたが、SBRTでは3ミリに絞り込めるようになった。1回当たりの放射線量は、これまでの通常分割照射や中等度寡分割照射と比べて2〜4倍に当たる7.25〜8グレイに。前立腺がんを抑え込む上でも効果的という。

「スパーサー」直腸保護

さらに、泌尿器科と連携し、SBRTをよりスムーズに安全に行うための方策も講じている。その一つが、前立腺のすぐそばにある直腸を保護する「スパーサー」の留置だ。

土谷総合病院泌尿器科（広島市中区）では、SBRTに先立ち、前立腺と直腸の間に薬剤を針で注入し、体内でゲル状に固めて「ハイドロゲルスパーサー」を留置する手術を実施している。スパーサーは、放射線を遮る壁のような役割を果たし、排便回数の増加や直腸出血などの副作用を減らす。ハイドロゲルは、半年から1年で自然に体内に吸収される。



グラフィック・本井克典

「仕事・介護と両立できた」 4月に治療の男性

今年1月に初期の前立腺がんと診断された広島市佐伯区の男性（67）は、4月に5回照射の放射線治療を受けた。「回数が少ないのは本当にありがたい。生活のリズムを崩すことなく治療ができてよかった」と振り返る。退職後も日々、忙しく過ごしている。

平日5日間働いており、週末には親の介護もある。「手術をすれば仕事を休まないといけないうえ、もう年も取っているので体になるべく負担をかけたくなかった」と、放射線治療を選んだ理由を語る。

3月にスパーサーと金マーカーを入れるため2泊3日で土谷総合病院に入院した後は、放射線治療のための通院だけ。「放射線の機械の上でうたた寝するくらい。楽でした」と話していた。



岩本泌尿器科部長

手術と同時に計約20分です。土谷総合病院の岩本秀雄泌尿器科部長は「患者さんの負担がより少ない治療ができるようになってきました。50歳過ぎたら腫瘍マーカー（PSA）で検診をしてチェックしてください」と話している。

もう一つは、前立腺への「金マーカー」の留置だ。SBRTで前立腺の位置をより正確に確認するための目安となるもの。直径0.9ミリ、長さ3ミリの純金の円柱を、前立腺の2カ所に入れる。スパーサーを留置す